

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺のなから奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話でイエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第2回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中断、下段の順に

(1) Thomas O. Lambdin による英訳

(2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳

(3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳の順に記載しています。

■ (No.004)

(4) Jesus said, "The man old in days will not hesitate to ask a small child seven days old about the place of life, and he will live. For many who are first will become last, and they will become one and the same."

(4) Jesus said, "The person old in days won't hesitate to ask a little child seven days old about the place of life, and that person will live. For many of the first will be last, and will become a single one."

(4) イエスが言った、「日々にある(高齢の)老人は、(生後)七日(目)の小さな子供に命の場所について尋ねることを躊躇しないであろう。そうすれば、彼は生きるであろう。なぜなら、多くの先の者は後の者となるであろうから。そして、彼らは単独者になるであろうから」

「笑雲先生、これは難しいですね」

「そうだね。小松茸。これは、前半と後半は、関連がないかもしれない。『先のが後になる』というのは、マルコの福音書10:31にも、マタイの福音書19:30にも出てくる。そちらの方も、脈絡がなく意味不明だ」

「では、一体何を言おうとしているのですか。笑雲先生」

「う〜ん、これもそうだが、こういうのは、『飛び言葉』といって、単独で伝承されていたものらしい。そのように言われている。つまり、つながりが良く理解できなくて、意味が分からない言葉という意味だ。それがここに挿入されている。だから、それがここに挿入されている意図があるのか、ないのか。このトマスの福音書でも、他の福音書と同様に、脈絡のない、飛び言葉なのか。あるいは、トマスの福音書は、あるべきところにそれを入れているのか。

つまり、ここにあってしかるべき言葉なのか、どうか。もし、そうであれば、そして、それが解読できれば、2000年理解できなかった顕著な『飛び言葉』の一つを理解できることになるかもしれない」

「ほう、それは、楽しみですね。ではお願いします」

では、まず、このセンテンスの前半から見て行きましょう。前半は、老人が命の場所を赤ちゃんに聞くという話です。そしてそれをしっかり聞いたら「生きる」と言っています。常識的に言って、老人が赤ちゃんに

そんなことを聞いても、話を通じませんから、赤ちゃんももちろん答えませんし、命の場所も分かるはずがありません。ですから、これは比喩です。

命の場所は、「真我」のある場所です。心のシステム図では、一番底の丸い部分です。そこにある真我は、生後7日間くらいまでは、まだ、マインドの使い方がわかりません。パソコンを貰ったけど、まだパソコンの使い方が分からないようなものです。それに電源をいれたばかりの状態です。パソコンである、マインドは、やっと働き始めていますが、まだ、肉体の一部と同じです。ハードが整っているだけです。思考システムになっていません。ですから、「真我」は、まだ、無垢で無防備の状態です。「真我」自体が外部に触れています。気分的には、自我の概念もありませんから、「私は宇宙だ」「私は神だ」「私は存在している」「私は嬉しい」という「悟った状態」とまったく同じです。私の瞑想体験からの理解で言えば、この時点では、だれでもエクスタシーを感じまくりの状態だと思っています。至福に漂っている状態。

さて、その「真我」が、何にも覆われていない状態でしばらくは居ますが、すぐに、お腹がすいたり、いろいろと生きる上での、肉体の欲求が発生してきます。ですから、その肉体を守るために、たちまちにして、思考機械であるマインドが働き始めます。

お腹がすけば、苦しく悲しいですから、どうすればいいのか、とりあえず母親を呼ぶ、さらに呼んでも来てくれなかったら、叫ぶ、泣き叫ぶ。そのように、すぐに、マインドが働き始めます。マインドは、自分を守るために思考を開始します。「自分がお腹がすいている」「自分が痛い」「自分が苦しい」について、その解消を図るための思考をし始めます。「他人が痛いのは、自分が痛いのではない」「他人がおっぱいを飲んでも、自分のお腹は膨れない」。いったい守るべき自分の肉体と、自分以外との境界はどこなのか、自分とはどの範囲なのか、どこまでが自分なのか。つまり、「自我」が目覚めます。そしてマインドが活発に自分を守るために働き始めると、またたく間にたくさんの「覆い」を「真我」の上に作って重ねていきます。パソコンで言えば、ソフトを構築していきます。システムを拡充していきます。それはしかし良いことです。当然のことです。生きて行くには、それが最善の方法です。それができないと生きてはいけません。

しかし、大人になってから、「命のある場所に戻ろう」とつまり、悟とろうと思うと、今度は、それらの覆いを突き抜けて、どんどん奥に遡って行く必要があります。「真我」を覆っているのは、真我の近くから、古い順に重積している膨大な記憶であり、学習した解釈であり、プログラムでありその先の、『受・想・行・識』の各マインドの組織です。それらを、外から中へと逆行して深く入って行く、つまり、真我を訪ねて深く逆に進んでいく作業が必要なわけです。そしてそこに到達すれば、そこには、生後7日目と同じ「真我」が存在していて、それに再び出会えます。それと一体になれます。つまり悟れるということです。

「ああ、なるほど。そうすると、笑雲先生、後半も、あながち飛び言葉でもないかもしれませんよ」

「ほう、そうかい。小松茸」

「そうですよ。だって、記憶もプログラムも古いものは、真我の近くにあるでしょ」

「それはそうだ。どんどん上にと覆いかぶせるように蓄積して行くからね」

「だったら、それをどんどん突き抜けて行くのでしたら、出てくるものは、後のものが先に出てくるわけでしょう」

「おお、そうじゃな。その通りじゃ。先のもは後で出てくるわけじゃ。古いものは、一番後に出てくる。瞑想の第二段階で古い記憶やプログラムが出てくるが、その出てくる順番を言えば、先に出て来るのは、後で覚えたものだ。一番先に、つまり一番昔に覚えてものは、一番後から出てくる。確かにそうだね。なるほど。凄いいじゃないか、小松茸。確かにそのとおりだ」

マタイの福音書、第20章に、先に入ったものが、後で出てくるという次のような例えがあります。

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。

五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。

そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。

最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはいけません。』

主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたのではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。』

自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

編集句を除いて、例えの内容だけみると、先に入れたものは、後で出てくるという例えになっています。先に入れたものが後になるという説明としては、とても分かり易いですし、出てきたものは、どれも同じ価値だということもイエスは言っていたのかもしれませんが、そして、古い昔の「覆い」を取るのが目的だけど、まずは、近くの覆いから順に取り去って行くことが必要だとも言っていたのかもしれませんが、

また、共観福音書全体に使えることですが、「天の国は、次のようにたとえられる」と文頭にある話は、ほとんど、「天の国」の話ではなくて、「瞑想や、悟りの仕組みの解説」の一部分のような気がします。もともとはそうであったような気がします。

しかし、歴史上、瞑想体験や、瞑想そのものがない、後続の弟子たちが途中で挟まると、その理解ができなかったり、説明できなかつたりしますから、その部分を、書き変えたりしたのではないかなと思えます。もともとは、「天国の気分になるには」「天国に行くには」だったかもしれませんが、とにかく、今となつては「天の国では」と、説明の目的のはっきりしない例え話になって、その例えだけが残っているような気がします。

余談でしたが、トマスの福音書にもどりましょう。

「なるほど。すると、笑雲先生、ここに『飛び言葉』があってもぴつたりということですね。すごい。飛び言葉の意味が分かったということですね」

「そうだね。トマスの場合は、適切な場所にその言葉が入っている、文脈として意味があるということだね」

「そうですね。なるほど。さて、ええと、笑雲先生、で、最後のところにある、単独者になるというのは、どういうことですか？」

「お、そうか、まだあったね。単独者も確かに分かりにくいね。英語訳の、one and the sameの方が分か

り易いね。single one でもいいけど。これは、まったく重なって同一になるということだ。つまり、今や自分は『真我』である、『真我』そのものであることを実感するということだ。『真我』が自分だとわかることだ。自分が『真我』だとわかることだ。まさに、one and the sameだ。本当に自分に帰つくということだ」

「なるほど。つまり、本当に悟るということですね」

「まあ、悟りをそう定義すればそのとおりだ。最高の境地だね。悟りの至福と言ってもいい。悟りの境地と言ってもいいね。してみると、この文章は、最初は支離滅裂な文脈だと思っていたが、ちゃんと筋が通っていたのだから。小松茸のお陰で、筋道を立てて解説することができた。素晴らしい。大したものだ」

「笑雲先生」

「何だい、小松茸」

「伊達に何年も弟子をやってませんからね。えへへ」

「ほんとだ。素晴らしい。小松茸を弟子にして笑雲は本当に嬉しい」

「あれっ、それって、結局いつもの言い方と同じじゃないですか」

「そうだね。あはははは」

「あはははは」

■ (No.005)

(5) Jesus said, "Recognize what is in your sight, and that which is hidden from you will become plain to you . For there is nothing hidden which will not become manifest."

(5) Jesus said, "Know what is in front of your face, and what is hidden from you will be disclosed to you. For there is nothing hidden that will not be revealed. [And there is nothing buried that will not be raised.]"

(5) イエスが言った、「あなたの目の前にあるものを知りなさい。そうすれば、あなたに隠されているものはあなたに現わされるであろう。なぜなら、隠されているもので、あらわにならないものはないからである」

「笑雲先生、一体これは何を言っているのですか。マタイにも、マルコにも、ルカにも、並行箇所がありませんね。それぞれ文脈は違いますが。あまりありがたい言葉と言う感じもしませんけど」

「そうだね。これを瞑想の説明という立場から言うと、先程の続きになるね。では、説明しよう」

「はい、お願いします。先程の続きですか、なるほど」

この、覆われているもので現れないものはないという文章は、例えば、マタイですと、10:26に、「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである」と同じように出てきます。

先程の、「後のものが先になる」の順で、隠されていたものが露わになってきます。しかし、厳密に全部そうかと言えば、私の経験では、100%そうであるとも言えません。どうしても思い出したくない「重い記憶」とかは、後回しなることもあります。が、大概は、「後のものが先になる」という順番にほとんど間違いはありません。

(※「重い記憶」とは、そのことを思い出して、もし、その記憶に関連して出来たプログラムを取り払ったとしたら、そのプログラム無しにこの世の中に立ち向かっていけるのかというような、自分にまだそれを抜去する準備が整っていないと思えるものが重いものになりがちです。自分に準備が整ったと思えば、